

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：21401
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2015～2019
 課題番号：15K03850
 研究課題名(和文) 高度化する現代医療における市民協働とシティズンシップの可能性に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Research on Possibility of Collaboration and Citizenship in Advanced Medical Care

研究代表者
 小松田 儀貞 (Komatsuda, Yoshisada)
 秋田県立大学・総合科学教育研究センター・准教授

研究者番号：00234881
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：高度化した現代医療は、かつてのパターナリズム的な性格を脱し、市民協働とコミュニケーションを重視したものに変わってきている。本研究ではこれを医療におけるシティズンシップの問題として捉え、がん患者会の形成、地域医療等の東北における先進的事例の意義と課題を追求した。市民協働とナラティブの視点に基盤を置いた医療や福祉はますます拡大しており、これを背景にした「聞き書き」活動が全国的に広がっている。ケア労働における「感情労働」の問題は残るが、こうした現実が、高齢者医療、地域医療、特に地域包括ケアシステムの構築に多大な影響を与えていることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、医療・福祉における市民協働とシティズンシップの要素が、近年、より重要性を増しているということを実例の検討を通じて明らかにした。また、医療・福祉の専門職が分野を超え、一般市民と連携協働することが、切迫する少子高齢社会の諸課題を克服し、特に地域包括システム構築するために不可欠の条件となっていることが本研究を通じて示唆された。これらの知見は、地域社会を誰もが相互に支え合う「ケア社会」として展望する可能性を示すものである。本研究の社会的意義もそこにある。

研究成果の概要(英文)：Today, our advanced medical care system changes its paternalistic character, and is being transformed into that is based on collaboration and communication. The study takes it as a matter of a citizenship in medicine, explored advanced cases of a making of a cancer patient group, a community-care-system etc. in Tohoku, and examined its significances and challenges. We find an extension of medical care services that are based on citizen collaboration and narrative and increasing "Listening and Writing" activities on a national level. We can also confirm that the changes work on positively the medicine for the aged, regional care, especially community-based integrated care systems, although "emotional labor" problems in care service roles remain.

研究分野：社会学

キーワード：医療 市民協働 シティズンシップ ナラティブ 患者会 ケアリング 聞き書き 感情労働

1. 研究開始当初の背景

近年の生命科学/技術の発展に伴う医療の高度化は、われわれの社会生活を大きく変えつつある。それは分子レベルの生命認識と技術革新(生物医学化(biomedicalization))を背景にしている。各種の検査、治療技術はこれによって飛躍的に進歩しており、実際われわれはこの多大な恩恵を受けている。

日本の医療においても、皆保険制度を基盤に長寿化や疾病治癒を極限的と言えるまで実現してきた。さらにゲノム解読、iPS細胞の作製など今世紀に入って加速する世界的な生命科学の発展は、難病から一般的な疾病まで医療への期待をさらに高めている。先進国共通であるとはいえ日本で特に深刻化している少子化、高齢化など人口学的な危機が進行する中、このことを背景にしてむしろそれゆえに健康や長寿はわれわれの社会にとってより強く求められるようになっている。

しかしながら、こうした技術的発展が医療の質、患者の生活の質の向上に直結しているとは言い難い。現代医療は予防や健康管理の名の下、その対象を広げる形で単に疾病の治療だけでなく、健康リスクを持つ患者予備軍たる一般市民の生活全般にまで介入し(医療化)医療と社会は以前にも増して関係を深めている。その接触界面にはさまざまな問題が浮かび上がっている。医療への期待と供給の間の齟齬の結果とも言える「医療崩壊」状況の深刻化はその一つである。ここには人口構造の変動、財政等の医療の客観的条件の問題にとどまらず、疾病観や死生観など社会の変化に伴う現代医療への眼差しの変化と共に情報化社会における専門家・非専門家間のコミュニケーションの問題が大きく関与している。

こうしたことを背景に、医療の社会過程はますます多様化・複雑化している。例えば発展著しいがん医療においては治療の精度は増す一方で、複数の薬品使用による副作用や合併症などの不確実性は高まっており、医療リスクへの関心も強まっている。がんや慢性疾患などの病を抱えた病者が生活する上での仕事や家庭との向き合い方も、治療の方法を大きく左右するようになってきた。さらに医療における利害関係者が拡大している。単に医師だけでなく看護師など医療技術職を含む医療者と患者やその家族との関係があり、その背後には医療者団体、患者団体がある。介護、ケアといった福祉領域の関係者も関与を強め多職種連携の必要が叫ばれている。国家/地方レベルの医療行政、製薬・医療機器企業さらには、公的私的保険等多種多様なアクターがそれぞれの利害を抱えて医療の場を形成している。

こうした状況の中で医師のみが医療の中心にある「良き医療を自らの能力と責任で行う」パートナーリズムは、現実には困難になっている。患者に理解を得られない治療は難しくなっており、心身の苦痛を抱える「当事者(患者)が中心の医療」を望む声は強い。医療をめぐる不要なトラブルを回避する意味でも、医療を供給する側と供給される側の間での知識の共有や信頼関係が重要なものと考えられるようになってきている。最近、当事者そのものへの理解、その「語り」(ナラティブ)に対して医療福祉関係者が強い関心を持つようになってきているのもその現れであろう。こうした状況の中、医療者と患者やその家族との「連携」や「協働」に注目が集まっている。上記の問題は、医療者のみならず医薬開発者など多くの利害関係者との関係構築を含む一般市民の医療への参加あるいは関係者間の協働(市民協働)として、自己の心身が健康(良好)な状態にあることを求め、それを保全しあるいは改善するための市民的な能力や権利の問題として考える事ができる。最近、市民参加、市民協働の視点は政治領域のみならずごく一般的なものになってきているが、N.Rose はまさにこうした状況を背景にして「生物学的シティズンシップ」(biological citizenship)という視角から医療を含む生命科学/技術と社会の関係を捉え直そうとしている。

本研究では、これを踏まえ、医療における市民協働とシティズンシップ(市民的能力/義務・権利)の問題を中心に据える。医師など医療従事者のみならず患者やその家族、患者になる可能性のある誰もが医療に関与する可能性を持つステイクホルダーである。今日、これまでの医療(制度)批判とは異なる形で、地域における保健活動など住民参加の事例を含め、専門/非専門を超えた市民協働もさまざまな形で発展している。関係者間で協調的であれ批判的であれ共にこれらも広くシティズンシップの現実的な形態として捉えられる。「生物学的シティズンシップ」は、A. Petryna が行った1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故後のウクライナ社会研究の中で開発された概念である。原発事故による被ばくという深刻な状況の中で人々が医師や科学者ら専門家たちとどのように関係を形成し、どのように自らと家族の健康と身体、生活・生命を守ろうとしたか、その社会的意味を分析する上で重要な概念である。Roseはこの初発の問題意識を重く受けとめながらこれを一般化して、難病治療や創薬に関わる医療アクティヴィズムのような市民的行動をも視野に入れている。申請者は、知識・文化社会学の視角から、現代医療の分析にこの一般化可能な議論が資するところは極めて大きいと考え、この視点の意義と課題について既に検討を始めているが、理論的な探究のみならず現代医療の現場に定位置した調査研究の必要性を強く感じている。本研究では、東北地域の医療関係者、患者団体らの活動に焦点を当て課題を探求することとした。

【文献】

1. Clarke, A.E. et al., "Biomedicalization: Technoscientific Transformations of Health, Illness, and U.S. Biomedicine", *ASR*, 68:161-194. 2003
2. 小松田儀貞 「「生物学的シティズンシップ」論の意義と課題」『秋田県立大学総合科学研究彙

報』第14号、15-23、2013

3.野口祐二『物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、2002

4.大本圭野『わが町はいかにして先進自治体となったか 交響する地域自治と生活保障』日本経済評論社、2012

5.Petryna,A.,*Life Exposed.Biological Citizens after Chernobyl*. Princeton University Press,2002

6.--., " Biological Citizenship:The Science and Politics of Chernobyl-Exposed Populations ",*Osiris*,19: 250-265, The Univ.of Chicago Press,2004

7.Rose,N.,*The Politics of Life itself: biomedicine,power,and subjectivity in the twenty-first century*.Princeton University Press,2007

8.30年後の医療の姿を考える会『メディカルタウンの自分力～救済の客体から解放の主体へ～』同会、2012

2. 研究の目的

近年、諸専門分野、とりわけ科学/技術の急速な発展により、専門家と非専門家たる一般市民の間の知識・認識をめぐる乖離はますます進んでいる。その一方でこれを埋めるべく両者・関係者の間でさまざまな試みが始まっている。本研究は、医療の高度化と他領域との複合化が進行する現代医療において、市民協働とシティズンシップ(市民的能力/義務・権利)の視角から、医師-患者関係のみならずこれを軸とした看護師、薬剤師等医療関係者および地域住民等の利害関係者間の連携・協働の動向に注目することを通じて、現代医療(福祉等の隣接領域も含む)の課題と可能性を明らかにすると共に、今後あるべき医療と社会の関係を展望することを目的とするものである。

3. 研究の方法

本研究は、医療における市民協働とシティズンシップ(市民的能力/義務・権利)の現状を探りその課題と可能性を明らかにすることを目的としている。その実現のために、以下の方法を取った。

医療におけるシティズンシップ論の理論的有効性を検証し、がん医療における医療者と患者の関係構築および協働の実態を把握すると共に、地域医療と包括ケアにおける住民参加および連携・協働の取り組みの実態を探り、医療・福祉の多職種連携を通して医療・福祉クライアントとの良好な関係構築を模索する活動の実態を明らかにする。

計画については以下の通りである。

に関しては文献研究として研究期間中継続的に進める。についてはまず対象地・対象組織の概要把握を進め(1年目)、研究協力者を中心としたそれぞれのキーパーソンを主要インフォーマントとして聞き取り調査を行い、またこれを補足する形で関係者に対するアンケート調査を実施する(2年目~3年目)する。最終年にこれらの知見を総括する(4年目)。

4. 研究成果

高度化した現代医療は、かつてのパターナリズム的な性格を脱し、市民協働とコミュニケーションを重視したものに变化しつつある。本研究ではこれを医療におけるシティズンシップの問題として捉え、がん患者会の形成、地域医療等の東北における先進的事例の意義と課題を追求した。研究成果を年度ごとに示す。

2015年度(1年目)

初年度は、その後の計画の基盤を作る期間として位置づけた。本研究の柱 医療におけるシティズンシップ論の有効性の検証を進めると共に、がん医療における医療者と患者との協働、地域医療と包括ケアにおける住民参加および連携・協働の取り組み、医療・福祉の多職種連携を通して医療・福祉クライアントとの良好な関係構築を模索する活動、それぞれの概要把握を行った。

については、専門職とクライアントの関係を「ナラティブ」の視点から認識しようとするアプローチについての研究に着手した。また、の課題の対象組織および地域である、がん患者団体「カトレアの森」(仙台市)、国保藤沢市民病院(一関市)、ものがたり診療所(盛岡市)および関連団体をそれぞれ訪問・視察し、主要関係者への聞き取りと資料収集を通じて活動実態の概要把握を行った。

以上を通して、患者会、地域住民参加の集会・研究会等の様々な契機を通じて、医療者が多職種間の連携を強めると共に医療者総体として患者(クライアント)とのより深い相互理解を図ろうとする傾向が以前に増して強まっていることが確認できた。これらを踏まえ、特に最近活動が活発化しているがん患者団体の活動事例として注目される「カトレアの森」についてそ

の活動の概要、背景について検討し、論文にして公表した。

2016年度（2年目）

2年目は、初年度における諸対象の概要把握を踏まえ、本年度から個別対象への接近を深めた。本研究の柱4本のうち、特に 地域医療と包括ケアにおける住民参加および連携・協働の取り組み、 医療・福祉の多職種連携を通して医療・福祉クライアントとの良好な関係構築を模索する活動についての研究に重きを置き、当該年度は、主として専門職とクライアントの関係を「ナラティブ」の視点から認識しようとするアプローチについての研究をさらに進めた。

具体的には、国保藤沢市民病院（岩手県一関市）が実施する諸事業や交流・研修の場（医療セミナー、ナイトスクール、地域包括ケア研究会など）の視察・聞き取り等を中心的に行った。特に同病院の地域住民との関係性構築の過程に着目し、それを「ナラティブ」の観点から把握すると共に、多職種間のコミュニケーション、専門職による「聞き書き」の実践など、医療・福祉の現場において「ナラティブ」がどのような理論的源泉として機能しているかについて対象地以外の実践事例にも注目しながら検討した。これを通して、医療・福祉の世界で従来の専門家パターナリズムを超えた動きが広がっていることが確認できた。

「ナラティブ」の理論および諸研究を検討すると共に、それが単に理論的源泉としてだけではなく、一つの実践的態度として現場で受け入れられていることに注目し、以上の知見を暫定的に総括して、「社会的実践としてのナラティブ」を主題化した論考を発表した。

2017年度（3年目）

3年目は、前年度までの研究を踏まえ、本研究の4つの柱のうち本年度も 地域医療と包括ケアにおける住民参加および連携・協働の取り組み、 医療・福祉の多職種連携を通して医療/福祉クライアントとの良好な関係構築を模索する活動についての研究に重きを置いた。本年度も前年度に引き続き、主として専門職とクライアントとの関係を「ナラティブ」の視点から認識するアプローチについての研究を進めた。

当該年度はそれをさらに進め、「ナラティブ」の実践としての「聞き書き」の活動に注目し、医療福祉現場で広がりつつあるその実践事例（秋田県および岩手県）を継続的に探るとともに、「ナラティブ」理念の実装・システム化というべき ICT を利用した情報共有ツール「ナラティブブック秋田」（秋田県由利本荘医師会地域）の実用化に注目してその展開をフォローした。これらについては学会報告でも取り上げ紹介した。

また、一方で補足的に本研究の主題に関連する理論・学説系の研究を進めた。社会保障論等の研究にも依拠しながら、看護専門職で重視されるケアリング（ケアすること）と生活モデルの重要性に注目し、それが医療のみならず福祉や一般的な地域社会においてその必要性を強めていることについて文献研究等で認識を深めた。医療・福祉における専門職優位のパターナリズムを脱し、ソーシャルワーク的な実践を通じたクライアント個々の生活に基盤を置いたケアの実現が求められている。ケア/ケアリングは、社会的包摂を共通の理念とした地域住民の参加と協働（シティズンシップ）と切り離せない一体のものとしてある。こうした視角から地域包括ケアの未来を展望する「ケアする社会」について考察し、論説にまとめた。

2018年度（4年目）

予定最終年度、これまでの研究成果を踏まえ、住民・市民参加および専門職の連携等の視点から、 患者経験者の医療への関与、 地域医療福祉の場における「聞き書き」活動、 ICT を利用した「ナラティブ」理念の実装システム「ナラティブブック秋田」の展開について、これまでの調査研究の振り返りと不十分な部分の補足の作業を行った。特に初年度の主たる調査対象だったがん患者経験者および団体については、約3年の時間経過があり、この間の変化について補足的に情報収集を行った。

ゲノム医療など医療の高度化がさらに進行する現在、研究倫理、医療倫理に関する社会的関心はそれに即応する形で高まっており、これに関わる行政や研究機関の諸委員会におけるこうした患者経験者の役割はますます大きくなっている。しかし、市民（非専門家）としてこうした重責を担う人材はなお少なく、一部の患者経験者に負荷がかかっている現状がある。医療現場における市民参加の問題の課題としてこれを考えることができる。

また、「ナラティブ」およびその実践としての「聞き書き」の活動については、岩手の事例（聞き書き活動の活発化と全国的な展開）および秋田の事例（「ナラティブブック秋田」）のフォローを行った。「ナラティブ」への関心が医療福祉の現場で高まる背景には、「生活モデル」に即した医療福祉のあり方を模索する動きが広がっていることが確認できたが、またそこには高齢者医療をめぐる制度的社会的困難等による現場の専門職の心理的負担として「感情労働」の問題が重要な要素としてあることが看取された。

これらの知見を元に「医療におけるシティズンシップの問題」について課題と展望の観点か

ら暫定的に総括し、論説にまとめた。

こうした動向は、市民協働とナラティブの視点に基盤を置いた医療や福祉の拡大につながり、それを背景にした「聞き書き」活動が全国的に広がっている。こうした現実が、高齢者医療、地域医療、特に地域包括ケアシステムの構築に多大な影響を与えつつあることが確認できた。

2019年度（5年目）

研究機関を1年延長し研究目的の高水準の達成を目指した。研究期間全体を通して「医療における市民協働とシティズンシップ」について、がん患者会の活動、地域医療・福祉における住民との連携といった事例を中心に、東北地域数か所の対象地における聞き取り、視察を通して検討してきた。高齢者医療においても、がん治療のような高度医療においても、かつてのパターナリズムは変化しつつあり、情報や意見交換の場づくり、「ナラティブ」の視点を入れたクライアントと専門職の良好な関係形成、また「聞き書き」活動を通じた医療福祉の場の活性化といった事例を通して医療に関与する市民の形成＝シティズンシップがそれなりに実現していることが確認できた。そこには「ケアリング」の視点に基づく「生活モデル」の重視という医療・福祉のあり方の変化が表れており、こうした変化は、地域包括システムの形成にもプラスに働いていることが本研究を通じて明らかにされた。

計画年度内にそれらについて、がん患者会の活動、地域医療におけるナラティブの意義、ケアリングに基盤を置いた「ケア社会」の可能性、～の総括と課題としての「感情労働問題」という主題で4本の論文にまとめた。

延長期間である最終年は、これらの論文で十分検討できなかった部分の再検討と調査対象者・地のその後の変化の把握に努めた。これに関連して、地域を超えて発展している「ナラティブ」と「聞き書き」の活動の調査の補完として「介護民俗学」の視点でケアを考えるワークショップに参加し、これまでの知見を深めた。上記に示した知見の整理と研究成果の振り返りを行い、コメントを加えて報告書にまとめ、これを2019年10月に発行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 小松田儀貞	4. 巻 20
2. 論文標題 医療におけるシティズンシップの可能性 課題と展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田県立大学総合科学研究彙報	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小松田儀貞	4. 巻 19
2. 論文標題 「ケアする社会」は可能か？ナラティブ、ケアリング、シティズンシップ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 秋田県立大学総合科学教育研究彙報	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小松田儀貞	4. 巻 5
2. 論文標題 日本女性会議2016秋田が残したもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 秋田県立大学ウェブジャーナルA	6. 最初と最後の頁 104-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小松田儀貞	4. 巻 18
2. 論文標題 社会的実践としての「ナラティブ」 地域医療・福祉の現場で	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 秋田県立大学総合科学教育研究彙報	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小松田儀貞	4. 巻 17
2. 論文標題 医療における市民協働の試み 「カトレアの森」の事例を中心に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 秋田県立大学総合科学研究彙報	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小松田儀貞
2. 発表標題 社会的実践としての「ナラティブ」 地域医療・福祉の現場から
3. 学会等名 第64回東北社会学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小松田儀貞	4. 発行年 2019年
2. 出版社 小松田儀貞	5. 総ページ数 51
3. 書名 高度化する現代医療における市民協働とシティズンシップの可能性に関する社会学的研究 研究成果報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>以下のサイトで研究成果を公開した。 https://www.facebook.com/高度化する現代医療における市民協働とシティズンシップの可能性に関する社会学的研究-1043604292325484/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----